

# しんせう

第41号



2003年12月  
(財)日本野鳥の会  
三重県支部



野の鳥は野に

西村 泉

今年やっと夏らしくなった8月下旬、三重県支部は警察、県との三者合同による密猟パトロールを実施した。通常、密猟パトロールはヒナが育つ時期(5~6月)に行なっているが、今年は悪天候などの理由で盛夏となった。

今回、私は参加できなかったが早朝より2台の車(8名)で出発し、幸か不幸か南勢地方の某峠で2件の密猟(密猟者3名)が発見された。いずれも今年巣立ったばかりのオオルリのヒナを狙った密猟だった。捕獲方法はオトリの野鳥や鳥の声のテープでおびきよせ、トリモチ棒にとまった野鳥を捕まえるというもの。トリモチ棒にとまった野鳥はもがき苦しむ。密猟されたオオルリの幼鳥は放されたが、トリモチ棒にびっちり羽根が付き痛々しかったとの報告を受けた。むろん密猟者は事情聴取され、検挙されたとのこと。

平日にもかかわらず、相次ぐ密猟者の出現にショックを受けた。密猟は売買や愛玩目的で行なわれ、根絶することが難しい。

長年、野鳥の会は「野の鳥は野に」を合言葉にカゴの鳥解放に向けて運動してきたが、密猟がなくなればかりか、依然として法律でメジ

ロ、ホオジロに限って1世帯につき1羽の飼養が認められている。また、外国産の野鳥に関しては何羽飼ってもよく、猛禽類なども数多く輸入されている。

今、県内各地でソウシチョウという中国産の野鳥が見られることが多くなった。カゴ抜けのこの鳥は藪などを好み、同じ環境で生息するウグイスと競合するため、在来のウグイスへの影響が心配されている。

本来、野鳥は自由に大空を飛び、野で高らかに歌ってこそ野鳥である。日本産、外国産を問わず、飼養するのは人工的に交配させたブンチョウなどに限るべきだ。

今一度、遠藤公男著の「野鳥売買 ―メジロたちの悲劇―」(講談社)を読んで、野鳥たちの悲痛な叫びを聞いてほしい。そして、野鳥の代弁者として何が出来るか考え行動を起こしてほしい。ひとり一人が新聞の投稿欄へ「カゴの鳥よりバードウォッチング、あるがままの自然を楽しむバードウォッチングは楽しい」などとアピールしてもいいだろう。

とにかく、私たちは「野の鳥は野に」の理念を粘り強く世間に訴え続けていかなければいけない。

今月の表紙：ペン画 平井正志

目次

巻頭エッセイ・今月の表紙	2
特集：木曾岬干拓地	
特集にあたって	3
木曾岬干拓地年表	3
鳥類調査報告	4
中部地方の干拓地	8
会員のページ	10
連載：ボーボー日記	13
野鳥情報	14
連載：今日も鳥日和	15
アートギャラリー	16
支部活動のページ	17
連載：鳥々図鑑	20
探鳥会報告	21
編集後記	24

わたしが初めてチュウヒを見たのは1979年2月4日天竜川河口と野帳に記録されている。以前に住んでいた清水からはるばる河口を見に行き、強風の中、中州の葦原の上を低く飛び回る不思議なタカを見たことを覚えている。その後宮崎学の写真集「鷲と鷹」で、日本にも繁殖地があることを知ったが、遠く北の地の話であると思っていた。それが木曾岬干拓地というごく身近な場所にあったとは驚きである。ぜひともこの繁殖地を後世に残してもらいたいものである。

平井正志 (安芸郡安濃町)



## 特集：木曾岬干拓地

### 特集にあたって

今回は三重県の北端、木曾川河口左岸の木曾岬干拓地を特集しました。ご存じのようにこの干拓地は猛禽の越冬地でもあり、今回の報告にあるようにチュウヒの貴重な繁殖地です。三重県はここを運動公園に変え、さらに将来は流通基地にしようとしています。この干拓地の利用については様々な意見が各方面から出されています。その中には海に戻す提案もあります。三重県支部保護部はこの干拓地を自然回復のモデルとして、そのままチュウヒの繁殖できる陸地として存続させ、さらに生物の多様性を持たせるため、小規模な土木工事で、池や、湿地、小規模

な林を作り、自然公園として自然教育の場とすることを提案しています(しろちどり39号、15-16ページ参照)。残念ながら、干拓地そのものに入るには三重県の許可が必要ですが、隣接する鍋田干拓地側の堤防から、様々な猛禽が観察できます。みなさんも是非一度と言わず、二度三度足を運んでみてください。そしてこの干拓地の将来について考えましょう。干拓地の将来を考える上での参考として、中部地方のいくつかの干拓地に関する情報も掲載しました。

(編集部)



### 木曾岬干拓地年表

保護部

- 1966年：木曾岬干拓事業着手
- 1968年：県境界問題発生
- 1973年：干陸（堤防排水完了）：費用160億円、112億円は農水省が、のこりは両県が分担
- 1990年頃：干拓事業休止状態に
- 1993/2/25：野鳥の会三重県支部／愛知野鳥保護連絡協議会 干拓地利用についての申し入れ
- 1993/3/28：月例探鳥会データ収集開始
- 1994年：両県で県境の基本合意
- 1994/6/10：県境確定（三重県362.5ha；愛知県80.9ha）
- 1995/12/14：野鳥の会三重県支部／愛知野鳥保護連 干拓地の自然復元についての申し入れ
- 1996年：長島町・木曾岬町町境知事裁定（長島町38.5ha；木曾岬町324.0ha）
- 1997年：干拓地土地利用検討委員会設置（三重県）
- 1999年：干拓地土地利用検討委員会報告書提出
- 2001年：三重県干拓地を買い上げ（145億円）、運動公園等の案浮上
- 2001/3/2：三重県支部／愛知野鳥保護連 干拓地利用についての要望書提出
- 2001/3/29：知事の回答
- 2001/4/27：道路公団へ高速道路遮光板設置の申し入れ
- 2001/6/22：三重県総合企画局と三重県支部話し合い（鳥類調査についての申し入れ）
- 2001/12/1：三重県総合企画局と三重県支部話し合い（鳥類調査についての合意）
- 2001/12/16：第1回木曾岬干拓フォーラム（茂田氏、森井氏講演）
- 2002/1/19：干拓地鳥類立ち入り調査開始（野鳥の会三重県支部／愛知野鳥保護連）
- 2002/11/10：第2回木曾岬干拓フォーラム（干拓地鳥類調査中間報告：中川氏講演）
- 2003/11/23：第3回木曾岬干拓フォーラム（鳥類調査報告）



# 木曾岬干拓地鳥類調査報告

2003年11月  
愛知県野鳥保護連絡協議会  
日本野鳥の会三重県支部

これは木曾岬干拓地鳥類調査報告を支部報し  
ろちどり用に要約したものです。

## はじめに

チュウヒは環境庁レッドリストでは絶滅危惧種  
II類(VU)にランクされ、冬季日本各地で観察  
されているが、繁殖が記録されているのは北海  
道、八郎潟、仏沼、河北潟、琵琶湖、及び木曾岬  
干拓地などで、ごく限られている。今回三重県が  
同干拓地に運動公園などを建設するとして、環  
境影響評価を開始した。我々は鳥類の生息地と  
しての木曾岬干拓地の自然を守る立場から、今  
回環境影響評価に平行し、独自にチュウヒの繁  
殖生態を中心に鳥類の生息を2年間にわたり調査  
した。

## 調査方法

干拓地内部での観察は愛知三重両県の担当部  
局員が同伴するという制約からほぼ月1回とした。

定期調査：2002年1月から、2003年10月ま  
ではほぼ月1回、堤防上の定点あるいは干拓地中央  
の道路から8:00から11:30まで観察した。当初は  
すべての鳥類の記録を取ったが、2002年2月以  
降では猛禽類、特にチュウヒの繁殖に重点を置  
いて観察した。干拓地内の位置は16に区画して  
表した(図1)。

ねぐら調査：ねぐら調査は16:00ころから日没  
後まで冬季に数回、堤防上の定点および干拓地  
中央の道路上から観察した。

## チュウヒ繁殖調 査結果

チュウヒは一夫  
多妻の場合もある  
ので、繁殖単位は  
「巣」で表した。お  
そらく「つがい」に  
相当するであろう。



しろちどり41号

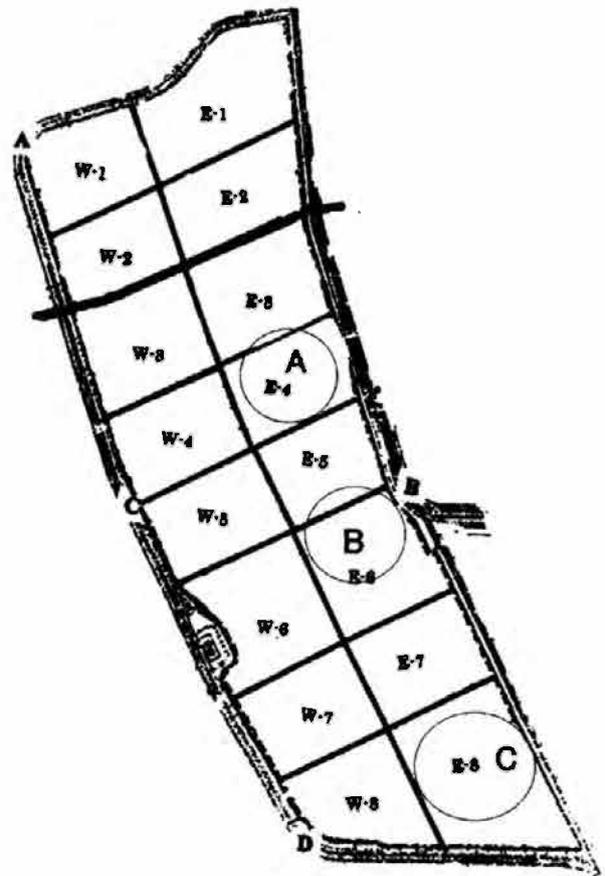


図1. 2003年の繁殖 おおよその巣の位  
置を示す。

## 2002年

繁殖行動は3月から確認された。3月23日お  
4月20日には高速道路北側で、ディスプレイが見られた。

5月18日には北側で1つがいによる巣材運  
び、餌渡し、ハシボソガラスを追い払う行動も観  
察された。同日干拓地南端西側W8でも別の1つ  
がいによるディスプレイが見られた。このつが  
いは羽色から高速道路北側のつがいとは別のつ  
がいであろうと推定された。また同日中央部、高  
速道路南側の木曾川よりW4でもつがいが観察さ  
れた。従って5月18日の時点で、干拓地全体で  
は2つがいは確実に形成され、3つがいが形成  
されていた可能性が高い。そのうち高速道路北  
側では巣作りが確認された。

6月2日には高速道路北側、東側で餌渡しが撮  
影された。しかし、6月15日には高速道路北  
側でメスを2回観察しただけであり、この時点



## 特集：木曾岬干拓地

で営巣が放棄された可能性が高い。7月20日の調査でも高速道路北側では採餌のみで、営巣行動はみられず、また他の地点でも、すべての巣で繁殖に失敗したものと推定される。

### 2003年

少なくとも3巣の繁殖行動が確認された。

**A巣：** 高速道路南のE4付近で営巣したものと推定される。

4月19日にE3,E4付近でつがいで飛翔が2回観察された(図参照)。

7月19日 E5付近でヒナ1羽が観察された。

8月16日にはメスヒナ1羽が餌を渡してもらうのがE3, E4付近で、2回観察された。このヒナは頭、肩、三列風切が鮮やかなクリーム黄色であり、C巣のヒナ(後述)と明瞭に区別できた。

**B巣：** E6付近で営巣したものと推定される。

4月19日にW4で 巣材運びが観察され、またE4付近でつがいの飛翔が観察された。

5月17日、6月21日にはE5でそれぞれ、餌渡し行動が観察された。しかし、その後ヒナは観察されていない。

**C巣：** E8付近で営巣したものと推定される。

4月19日E7で入り込んだ幼鳥に対してメスがスクランブルをかけたのが観察された。

5月17日にはカラスに対して縄張り行動が観察された。

6月21日にはE8で巣材運びと餌渡しが観察された。

7月19日にはE8で、餌渡し、さらにヒナ2羽が観察された。

8月16日にはE6で2羽のヒナが観察され、オスから餌を渡されるのが確認され、さらに餌をもらわなかったヒナがオスに空中で何度も絡ん

で、餌をねだる行動が観察された。このヒナは胸、頭が赤味のあるレンガ色であり、Aつがいのヒナと明瞭に区別できた。なおヒナに給餌したオスはCつがいのオスであるので、このヒナ2羽は7月19日に観察されたCつがいの2羽のヒナであろうと推定された。

### 繁殖期の行動範囲と縄張り

C巣のオスの行動範囲：もっともよく観察されたのはC巣のオスの行動である。

2003年5月から8月までのオスの行動を図2にまとめた。行動はW6, E6より南の地域に限られた。しかし、時々ゴルフ場へも採餌にでかけている。C巣のヒナの行動範囲も8月までは同じ地域に限られており、このつがいの繁殖行動範囲と思われる。

高速道路北側では繁殖行動が観察されなかった

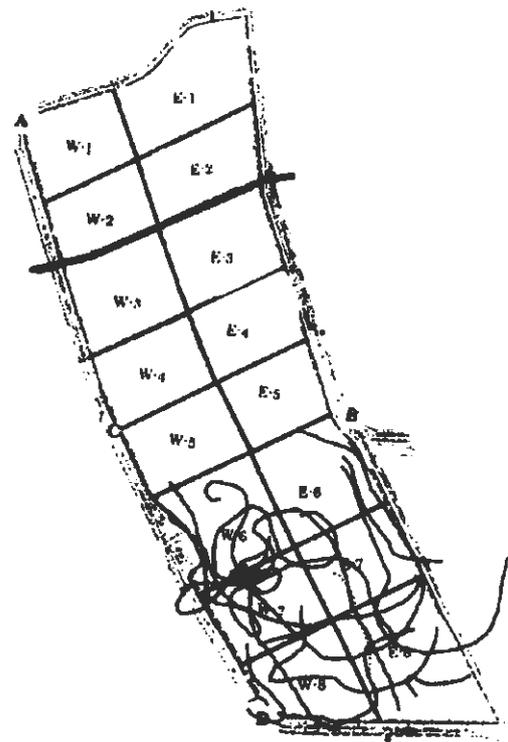


図2. C巣のオスの行動範囲 5, 6, 7, 8月の行動を重ね合わせて表示した。



## 特集：木曾岬干拓地



が、E1,E2ではしばしばチュウヒが観察され、採餌場所として利用していると推定される。

### 採餌について

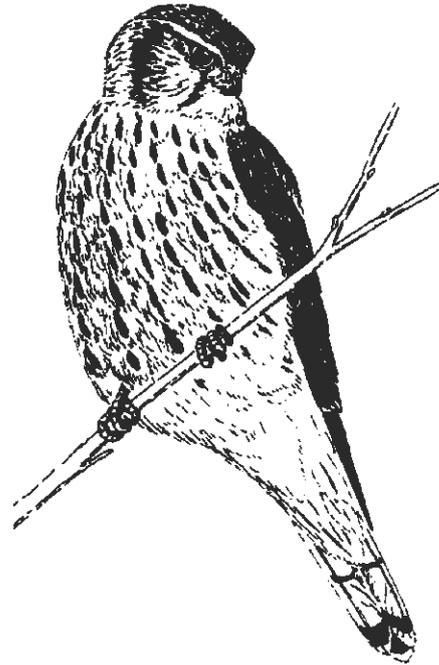
捕食を間近で観察する例はほとんどなく、餌の同定は困難であるが、大半の餌はねずみ類であると推定される。しかし、4月19日にはE1,E2でオスがカルガモを襲うのが、7月19日、鍋田干拓地でオスがツバメを空中で捕食したのが観察され、少なからず鳥類も捕食していると推定される。

### 猛禽類ねぐら調査

ねぐら調査の結果は表1のとおりである。

コチョウゲンボウ:ほとんどは中央工事道路の電線上で観察された。

チュウヒのねぐらは主として木曾川よりの地域であり、2002年12月の調査では、飛来したチュウヒがねぐら周辺の樹上にいったんとまり、その後、暗くなってから、地上に次々と降りるのが観察された。



チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウ、キジ、コチドリ、ケリ、クサシギ、キアシシギ、イソシギ、チュウシャクシギ、ユリカ

表1 ねぐら調査の結果

	2002/2/13	2002/12/7	2003/1/18	2003/2/15
チュウヒ	16	27	35	19
ハイイロチュウヒ	0	6	4	4
コチョウゲンボウ	4	44	25	29

### その他の鳥類の生息

2年間に観察された鳥類は以下のとおりである。越冬期の猛禽は数、種類とも多く、これまでの、干拓地外からの観察をうらづけるもので、特筆にあたいする。チュウヒ以外の猛禽で注目に値するのはミサゴである。ミサゴは通年観察され、個体数も多い。繁殖の可能性もあるが、営巣が確認されていない。木曾岬干拓地に適当な高木があれば繁殖する可能性が高いと考えられる。

### 今回の調査で観察された鳥類

カイツブリ、カンムリカイツブリ(木曾川、伊勢湾)、カワウ、ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミサゴ、トビ、ハチクマ、オオタカ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、

モメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコ、コアジサシ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、オオヨシキリ、セッカ、メジロ、ホオジロ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、以上 62種

### 考察

チュウヒの繁殖について

2002年には高速道路北側で繁殖行動が見られたが、失敗したものと推定される。推定される巣の近くで不法侵入者が除草剤を用いてラジコン機の滑走路を作り、繰り返し、進入してラジコン



## 特集：木曾岬干拓地

機を飛ばしていた。これが営巣失敗の原因になったことが考えられる。

また高速道路南側でも2カ所で繁殖行動やつがいらしきものが観察されたが、餌渡しやヒナが観察されておらず、成功していないと思われる。

2003年の繁殖期ではすくなくとも3箇所、おそらく3つがいで繁殖行動が確認され、Aでは1羽、Cでは2羽の巣立ちヒナが確認された。Bの巣のヒナは確認できていない。

南側のつがいCではオスの行動から約150haの行動範囲が推定された。この個体はゴルフ場方面へも飛来し、採餌していたと思われる。また、鍋田干拓地へもしばしば進入する個体が観察され、同干拓地も餌場と利用されていた。また高速道路北側では2003年に繁殖は見られなかったが、餌場としては利用されていると推定される。したがって木曾岬干拓地全体および鍋田干拓地の少なくとも一部を利用して3つがいが繁殖したものと推定される。

### ねぐらについて

2002年から2003年の冬季の観察での最高個体数はコチョウゲンボウ44羽、ハイイロチュウヒ6羽、チュウヒ35羽であった。日没という条件の悪い時間で、かつかぎられた地点からの観察であるため、実際にこの干拓地でねぐらをとっている個体はこれより、かなり多いと思われる。すなわち、これまで推定されていた個体数をはるかに上回る個体がねぐらをとっていると考えられる。これまで日本でこのような多数の猛禽がねぐらをとっているのを確認した記録は

ない。昼間にこれほどの個体が干拓地に生息するとは考えられず、鍋田干拓地や周辺の生息地からねぐらを取るために飛来したと想定される。これは

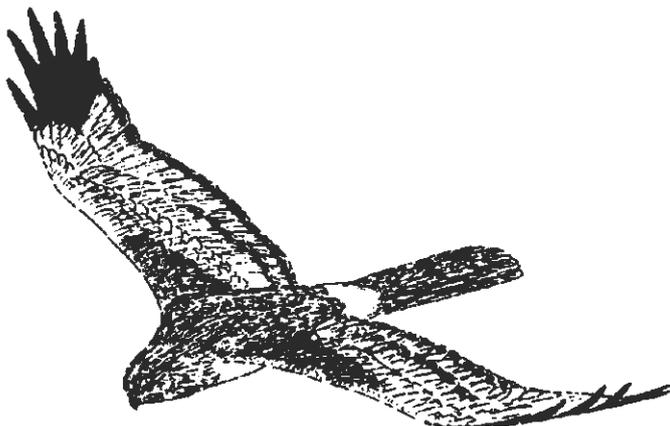
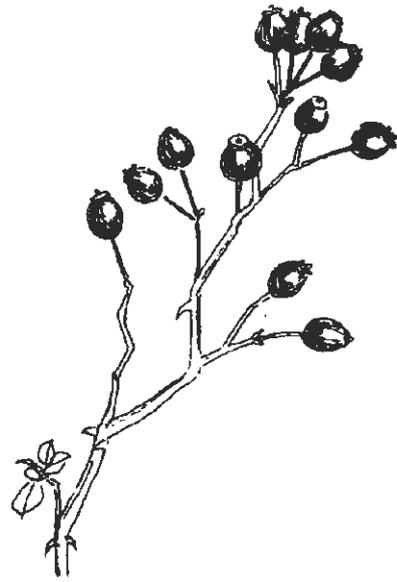
この干拓地に人の侵入がほとんどなく、また野犬などの外敵もいないためであろう。特に地上でねぐらをとるチュウヒにとっては外敵の存在は脅威であろう。したがって同干拓地は木曾三川河口に越冬生息する猛禽にとって重要なねぐらである。

### 鳥類生息地保護のために

今回の調査で木曾岬干拓地が複数のつがい繁殖できる本州中部では数少ない繁殖地であり、また冬季猛禽類の重要なねぐらであることが判明した。運動公園などにはせず、このまま、鳥類の生息環境を保持すべきである。しかし、干拓地全体が平坦であり、環境の多様性に乏しい。たとえば、開水面や若干の高地、林などを作り、多様性を持たせた方が鳥類の生息も増えると考えられる。人の立ち入りを制限しながら、利用すれば木曾岬干拓地は猛禽の繁殖を間近に見ることができる、このうえもない環境教育の場ともなる。

### 謝辞

愛知県、三重県の関係部署の方々には休日にもかかわらず、今回の調査に同行していただき、多大な迷惑を掛けた。ここに記して、感謝の意を表明する。





## 本州中部の干拓地

平井正志（安芸郡安濃町）

（緒論）

かつて、本州中部の平地にも農地として利用されていない、いくつもの沼沢地や原野があった。それらの多くが鳥獣の重要な生息地であったことは想像に難くない。その多くは江戸時代以降、幾度も水田にするべく、干拓や開拓の試みがされていたが、当時の土木技術水準では条件が悪く、残されていた所が少なくない。ところが、第二次世界大戦後の食糧難を乗り切るため、農林省により、大規模かつ近代的な干拓が行われた。それは食糧事情が改善された後も依然として続行された。生態系維持のため、部分的に湿地や原野を残すなどの対策はほとんどとられず、全面が農地となった。

（各論）

### 浮島沼（うきしまぬま）

沼津から富士にかけて新幹線は平地を通らず、山麓を通っている。これはこのあたりの平地がかつて沼沢地であり、地盤が軟弱であったことに由来する。富士川が駿河湾に運んだ砂が千本松原の砂州を作り、それに囲まれた地域は浮島沼とよばれ、東西約15km、南北約1.5kmの広大な湿地と湿田であった。湿田といっても腰までもぐるような田であったという。戦後も芦原と湿田であったが、農林省により排水路が作られ、徐々に乾田になっていった。1980年代までは湿田がかなり残り、人の容易に入り込めない連続した葦原が広がり、その中に野生のノハナショウブが咲いていた。チュウヒが数多く越冬し、ハイイ



しろちどり 41号

ロチュウヒやコチョウゲンボウ、ノスリ、コミミズクも頻繁に見られた。また夏にはササゴイが繁殖した。今ではほぼ完全に乾田になり、工場があちこちに建設されている。それでもそここに小規模ながら、芦原が残っている。今でもチュウヒ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウなど様々な猛禽が越冬する。ここで撮影されたコチョウゲンボウの写真は多くの雑誌、出版物に掲載された。鳥類の保護には特別の手だてはとられていない。（しろちどり15号「はるかなる浮島沼」参照）。（最寄IC：東名；富士IC、沼津IC）

### 巨椋池（おぐらいけ）

京都の南、木津川、宇治川、桂川が合流する地点はかつて800haに達する巨椋池と呼ばれる巨大な池であった。それ以外にも上記3河川、およびそれが合流した淀川の周囲には多くの湿地があった。江戸時代から干拓が続けられてきたが、1941年には干拓が終了し池が消失し、京阪神周辺では数少ないまとまった農地になった。巨椋池以外の湿地も現在ではすべて、住宅地になっている。残存する湿地はないが、付近の宇治川の河川敷にはかろうじて葦原が残されている。干拓地は今でも猛禽やコミミズクの越冬地となっている。しかし、近年高速道路の建設で、猛禽類生息の条件は悪くなっている。（最寄IC：京滋バイパス；巨椋IC、三重からは名阪国道から国道163号を経て国道24号をたどるのがよい）

### 大中の湖（だいなかのこ）

琵琶湖にはかつて数多くの内湖があった、琵琶湖の南東に広がる大中の湖は周辺の内湖をふくめると1700haにおよび、そのうち最大のものであった。安土城のある丘はこの内湖のほとりにあった。織田信長は天守閣から眼下に広がるこの湖と、比叡山に落ちる夕日を眺め、天下攻略の策を練ったことであろう。1957年から干拓工事が開始され、1968年に完成した。農地は琵琶湖水面より3m低く、ポンプによる排水で維持されている。この内湖の西側の一部は葦原や水面が残され、今は西の湖（にしのか）とよばれ、チュウヒ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウな



## 特集：木曾岬干拓地

どの猛禽類も越冬し、鳥類も豊富である。また東側にも小面積の芦原と水面が伊庭内湖(いばないこ)として残されている。琵琶湖の湖岸のほとんどがコンクリートで固められ、葦原が消失した現在ではこれらの湿地は貴重な存在である。(最寄IC: 名神; 八日市IC)

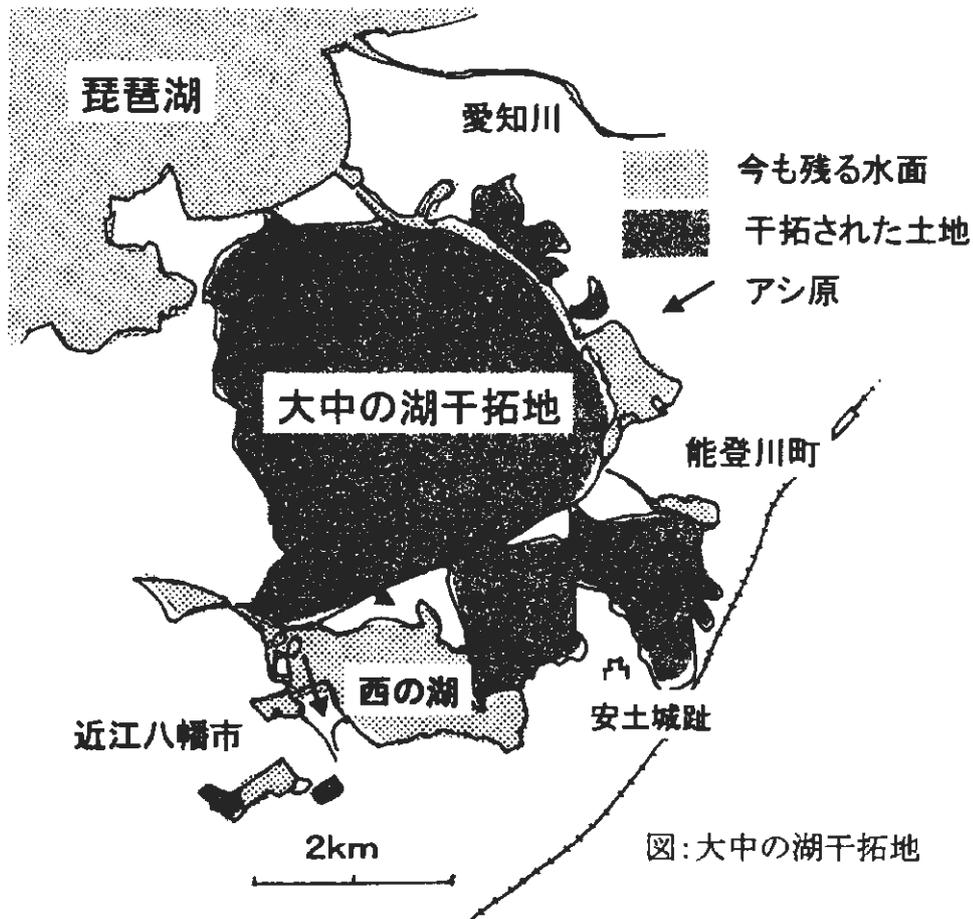


図: 大中の湖干拓地

### 河北潟

(かほくがた)

石川県金沢市の北にあり、2400haにも及んだ湖。内灘砂丘により日本海と隔たれていたが、大野川で日本海とつながった汽水湖であり、スズキ、ボラ、シラウオ、ヤマトシジミなどの漁獲があった。大正時代の地図によると湖の周辺もかつては湿地であり、芦原が広がっていった。1963年から大規模な干拓が行われ、1971年に完成し、湖の北側1359haが牧草地や畑の農地となった。干拓当初は芦原や草原となり、チュウヒが数多く繁殖した。湖の南側は残されたが面積は1/3になり、コンクリートや矢板による護岸が施され、また水門が設置されたことにより、淡水となり、現在では水質汚濁の問題が起きている。干拓地は現在でもコハクチョウや多くの猛禽の越冬地となっており、ケアシノスリがよく見られることで有名である。珍鳥アカアシチョウゲンボウが飛来したこともある。現在もチュウヒ、ミサゴが継続して繁殖する。鳥類保護のための積極的な方策はとられていないが、水路に面する芦原はチュウヒの営巣地となっている。(最寄IC: 北陸; 金沢東IC)

### 鍋田干拓地 (なべたかんとくち)

木曾川河口左岸の639haの干拓地、1946年に起工され、1959年に入植が開始された。しかし同年9月の伊勢湾台風により、甚大な被害を受け、復旧工事が続けられ、1963年に干拓と高潮対策が完了した。干拓当時から鳥類の豊富さで注目されてきた。これまでに記録された鳥類は630種におよぶという。ハイイロガン、クロツラヘラサギ、シベリアオオハシシギなども記録されている。昨年(2002年)はオオカラモズが飛来して、多くのバーダーが集まった。野鳥研究者やバーダーの要望により、伊勢湾台風で芦原と沼地になっていた干拓地の一部を愛知県が農林省から買収し、216haを弥富鳥獣保護区とし、1975年に弥富野鳥園が開園した。池、樹林が作られ、野鳥の貴重な生息地であり、かつ環境教育の重要な場所となっている。チュウヒやオオタカが繁殖した年もある。

(最寄りIC: 伊勢湾岸自動車道; 弥富木曾岬IC)



## まとめ

ここに掲載した大規模な干拓地のほとんどがかつて鳥類の重要な生息地であった。農地に改変された今でも、猛禽の越冬や繁殖が記録されている。しかし、保護対策はせいぜい鳥獣保護区に指定するくらいで、全くといってよいほどない。鳥類の生息に必要な場所が積極的に確保されているのは鍋田干拓地の弥富野鳥園くらいであろう。多くの場合耕作が一時的に放棄され、人が侵入しなくなった部分がねぐらや休憩場所となっている。

山や海の自然は部分的ではあるが、これまで国立公園に指定されるなど様々な形で保護されてきた。しかし、平地の原野や沼沢地はありふれたものとして、一般の市民も感心が薄く、また行政側も注目して来なかった。バーダー、釣り人、写真家、画家など一部の人間がその自然の価値を認識し、楽しんでいたにすぎない。しかし、そのような場所はもはやほとんど残っていないのが現状である。北海道は別として、本州中部で100haの連続した原野が平地にあるだろうか？

わずかに残っている川沿いの芦原、河川敷や

琵琶湖西の湖の芦原にしても、動植物の保護のためにこれといって特別な保護の手だてがとられていない。また河川敷の多くがゴルフ場や運動公園に変えられている。

改変されていない原野、利用されていない農地などを利用して平地の鳥類生息環境保護対策に積極的にのりだすべきである。まず、鳥類、植物を含む自然の調査、それにもとづく、保護対策、保護区設定、これらの地区に一定の特別保護区を設け、繁殖期と越冬期に人の立ち入りを制限するだけで、多くの鳥類が繁殖や越冬することは可能である。できれば専門のレンジャーを配置したり、一部を原野にもどしたりする試みも重要であろう。今回の特集のテーマである木曾岬干拓地での試みが期待される。

## (探鳥ガイド)

これらの干拓地は今でも魅力的な探鳥地である。特に冬季、猛禽の観察には適している。しかし、範囲が広いので、自家用車が必須であろう。最寄りのインターチェンジを記載してある。農耕地も多いので農作業の邪魔にならないよう配慮もわすれてはならない。

## 乗鞍のシギ

真田 ちか (四日市市)

9月初め、雷鳥を見に立山へ、そしてマイカー規制後初の乗鞍へと行って来た。立山ではウソの姿と、メボソムシクイの声が、お出迎え、雷鳥は見られず。それでは、と望みを託し乗鞍へ。バスでスカイラインを走る事50分、畳平終点付近ではイワツバメが飛び交い、ホシガラスもちらほら見られる。そして山上湖の鶴が池に目をやった時、水面に水鳥発見！何度か来る機会があったけれど、この池で生き物の気配を感じた事は無く、急ぎ下車、双眼鏡を合わせる。何と、そこには紛れも無いアカエリヒレアシシギ・13羽。焼尻の海で見たのと同じクルクルと忙しげ

に泳ぐ特徴ある姿。 標高2702メートル、ハイマツと高山植物に囲まれたこの場所に、何とも不思議な取り合わせである。考えてみれば、この数日は残暑が厳しく、鳥達も避暑を兼ね、ここまで上がって来たのか、餌はあるのか、いずれにしても、シギのみぞ知る、である。身にしみる寒さも忘れ、しばし見とれてしまった。やはり自然は面白く、これから先も、鳥見は止められそうに無い。今頃、あのシギ達はどこで何を見ているのだろう。雷鳥には、とうとう会えなかったけれど、思いがけない発見の旅だった。

アカエリヒレアシシギさん、ありがとう。そして、これからもずっと、地球の大切な仲間であって欲しい。



## 賢いクマガラ家族

松島雅之（北海道苫小牧市）

6月の北海道、本州に住む皆様方にとって明るく輝く太陽、草原には一面に草花が咲き乱れ・・・と天国のようなイメージを持っていただけるのではないのでしょうか。しかし北海道でも太平洋側、特に私の住む苫小牧市ではほとんど太陽を見ることの無い暗くて寒い季節の始まりなのです。

そんな我が町にも生命の輝きは確実に訪れてきます。草原ではノビタキ夫婦が忙しく雛に餌を運び、職場の軒先にはスズメの雛がジュリジュリと親鳥を待っています。

そして7月、ノビタキの二番子が孵る頃、私達はアカショウビンの巣立ちに立ち会うため道南の深い森に出かけて行きました。長丁場に備えそれぞれ折り畳み椅子と虫除け三点セットに身を固め、いつの間にか決まってしまった自分の場所でカメラを構えていました。

午前五時を過ぎたころ突然アカショウビンの巣の近くからキョーンキョーンとクマガラの鳴き声が聞こえてきます。集まった人の全員が北海道の人達なので誰も興味をしめさない。今日は珍しくよく鳴くなあなんて思っていると、突然誰かが「巣立ちだ！」と叫ぶ。何とアカショウビンの巣からほんの20-30メートルほど離れた巨木の穴にクマガラが営巣していたのです。毎日のようにここにやってきている人達の誰も気が

付いていなかったのです。そしてわずか30分で3羽、最後の4羽目も1時間の内にあっさりと巣立ちをしてしまいました。

通常警戒心の乏しいクマガラの子育ては、親鳥が大声で鳴きながら飛んできて、巣の入り口で雛に餌を与えるのですぐに人間に気付かれてしまいます。しかも気の弱い性格の彼らの巣立ちには二日も三日も前から巣の入り口に体を乗り出し、今か今かと周りの者をやきもきさせる。それなのに今回のこのあっさりした巣立ちは何なのだろう。

その秘密はすぐに分かりました。今巣立ちをしたばかりのクマガラの雛を気の荒いアカショウビンの親が徹底的に追いかけて回してどこかに追い出してしまったのです。こんな状況ですから、餌を運ぶ親鳥でさえ警戒をして自分の巣に近づくためにはアカショウビンの死角からそっと近づく。それが我々からも死角にもなっていて気が付かなかったのでしょうか。

このクマガラ家族はひたすらアカショウビンから身を隠して行動していたため、人間にも知られず、結果として悪名高き「エコツアー」の餌食にならずに済んだと言う幸せな巣立ちができたのでしよう。

ちなみにアカショウビンの巣立ちには実にあっけないものです。巣穴から嘴が見えてきた、と思う間に顔が見えてきて、ビューと飛び出す。アッと言う間の出来事です。

## バードウォッチングと俳句

(野鳥の俳句入門)

坂口草人(鈴鹿市)

### 私の俳句入門

野鳥と人との付き合いは長い、それもその筈人の歴史は500万年、鳥は爬虫類から進化し、1億5000万年、始祖鳥は生まれた。大先輩格である。小さいが素晴らしい。

子供の時から鳥は憧れの的であった。美しい、可愛い、その上自由に飛ぶことができる。定年近

くなつた頃、先輩から俳句を勧められるまま、呆け防止になればと、野鳥も立派な俳句の題材、フィールドノートにメモ書きでごまかしていた。

このような自然のなりゆきから、私は野鳥と俳句の趣味が拘わりをもつようになっていった。さて、俳句の巨匠、高浜虚子の俳句理念に「花鳥諷詠」「客観写生」がある。春夏秋冬四季の移り変わりによって興る自然界の現象と、人間社会のかかわりを諷詠するのだ。とある。

私達は日頃野鳥を通じて、自然との振れ合いの中に得難い感動と、生きた知識を与えられて



いる。バードウォッチングも、作句吟行と共通するところが非常に多い。双方とも、先ずは自然の観察からはじまる。そこで気掛かりなのは、先輩格鳥の生息地を人が侵していることだ。「野鳥も人も地球の仲間」「自然と人の共存」のフレーズは俳句も共通である。

### 野鳥が主役

俳句で野鳥の句を作るとき、野鳥の季語が大役を担っている。詠まれる野鳥は単なる添え物ではない、その句の主役なのだ。野鳥の背後に潜む季節感なり、叙情が読む人に伝わることだ。

野鳥の季語の分類はややこしい、留鳥は年中棲息しているので、どの季節に詠んでも不自然ではないが古くから先輩達の季寄せ、歳時記など伝統的な季感を尊重して、分けられている。腑に落ちない点もいくつか感じられるが、これはまた別の問題だ。

### 俳句は自然観察の記録

俳句はどちらかと言うと、高齢者に好まれる。それは、「安直に入れる」何の準備も要らない。紙とペンがあればOK、一句作った時が俳句入門である。そうして俳句は、

- ① 季語と17音数(5・7・5)で完成
- ② 四季の自然、風物と解け合った短詩
- ③ 人との交わりが大勢得られる

俳句は自己の簡単な記録メモであり、何よりも自然観察が根底である。それに、日常生活における感動を書きとめて自己満足が自然と行われる。

秋風や書かねば言葉消えやすし 朱鳥



しろちどり41号

### 冬の鳥

鶯鷹は種によっては年中みられるが、鷹の冬はまた格別な求愛飛翔や、巣作りがはじまると聞く。冬の鳥類は「冬」「寒」を付けて季語とする。例えば、冬の鶯・冬の鶡・寒鶯・凍雀・凍鶴と呼ぶ。

鴨が来る一冬鴨と付合うか

静寂なる池に一声鳩番

眼白鳴く餌催促の定期便

近寄れど傍若無人鷓鴣

古池に威儀を正した田鳧かな

吹雪くなか冠羽揺らして頭高

荒れた田に鴉群がる四温かな

鴨の陣一羽二羽翔ち百羽翔つ

鷹舞ひて碧落俄か広がれり

笹鳴きも日々に艶増し垣根より

おことわり

ある日、突然俳句のことを書いてくれと頼まれ何を書いて良いのやら、始めからその資格はなかった。貴重な紙面を費やし申し訳ありません。そうして、俳句と言う伝統文芸を汚すことになった。お詫びしてペンを擱く。

—紙面の都合上冬の鳥の句のみを今号に掲載しました。他の季節の句は順次掲載いたします(編集部) —



連載：ポーポ一日記 PART II

橋本富三（津市）

9月〇日

静岡でオオタカの保護活動を熱心にされている〇〇講師を招いての保護部勉強会に参加した。過去の保護活動経験や問題点、オオタカの習性についての話が一段落したところで講師がおもむろにビニール袋から羽根の束を取り出すと机の上にばらまいた。「昨日拾ったのですよ。ハチクマの幼鳥のようです。」ウワー贅沢にも一羽分の羽根丸ごと。これが尾羽、これが初列、これが次列風切ですね。この長さ、この模様、この形、さすがに幼鳥とはいえ猛禽の羽根は迫力がある。（一枚でいいから欲しいな。でも言いにくいな）。そんな一同の思いを知ってか知らずか、〇〇講師はすべての羽根を元のビニール袋に納め、「ジャーさよなら。お元気で〜。」と去っていった。あとで一同悔しがることしきり。

今日のお勉強でよくわかった事。チャンスには前髪はあるが後ろ髪はない。チャンスが過ぎてからその髪を掴むことは不可能である。

10月〇日

3月の中ほどからシジュウカラのペアが庭の巣箱で巣作りを始めているのに気がついていた。

一方が枝で見張りをしている中、もう一方がせっせと巣の材料を運んでいるようだった。10日あまりそんな日が続き、やっと我が家で、ヒナ誕生かと喜んでいたが、その後ふいと姿をあらわさなくなってしまい、巣作りは途中で放棄されたようだった。

夏の間は、戻ってくるかも知れないとそっとしておいたが、今日あきらめて、巣箱を掃除しようとして中を開けてみた。巣はシュロの繊維や隣家の犬の毛、ミズゴケなどでできっちりと柔らかく、とても居心地良く完成されていたが、卵はかけらも見あたらなかった。そして巣箱の天井に作りかけのアシナガバチの巣があった。これに嫌気がさしてシジュウカラは巣を放棄したのかも知れないと納得した。

自分の家にハシブトガラスほどもある蜂の、おおきな巣が天井からぶら下がっている下で、ご飯を食べるのは、やっぱりうれしくないもんね。

11月〇日

以前作った巣箱はベニア合板のもので、長年の雨風で接着の糊がはがれてしまい、みすぼらしくなったので新しく巣箱を作った。1つ作って我ながらうまくできたと思い、勢いで後3個一気に作った。差しあげれば喜んでもらえそうな





人を思い浮かべながら仕上げの塗装をしたが、その夜は腰と腕が痛かった。少し無理をしたようだ。

12月〇日

ハクセキレイの落鳥をある人からいただいた。どこも痛んでいないように見えたが落鳥していた場所から考えると交通事故のようであった。取りあえず翼長と全長を測ってみた。全長は19cm、翼長が長く28cmもあった。体重を量ろうと台所の料理秤を考えたが妻がいやがるかも知れないと思いやめようかと思った。しかし思

い直して、学問の進歩のためだ、妻よ許せと台所からこっそり秤を持ち出し量ってみた。思いの外軽く25gであった。その夜、なにも知らずに妻は料理秤で小麦粉を量り、クッキーを作った。食べてみるとハクセキレイの無念の顔が浮かんで消えた。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

現在PARTⅢ執筆中。乞うご期待。

## 野鳥情報

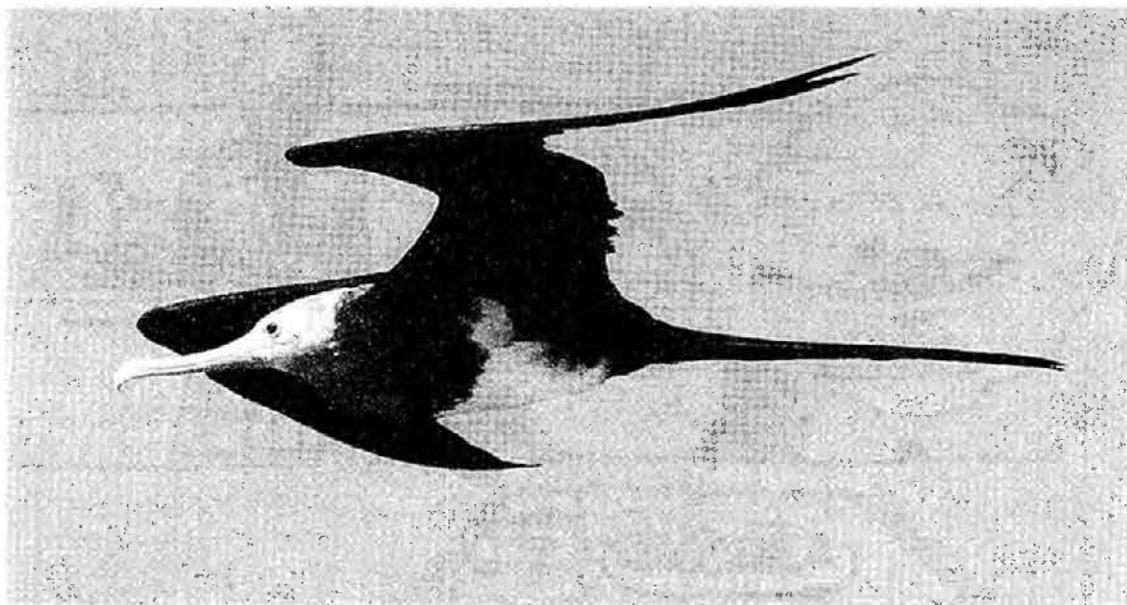
### 県内に迷鳥コグンカンドリ飛来

市川雄二（四日市市）

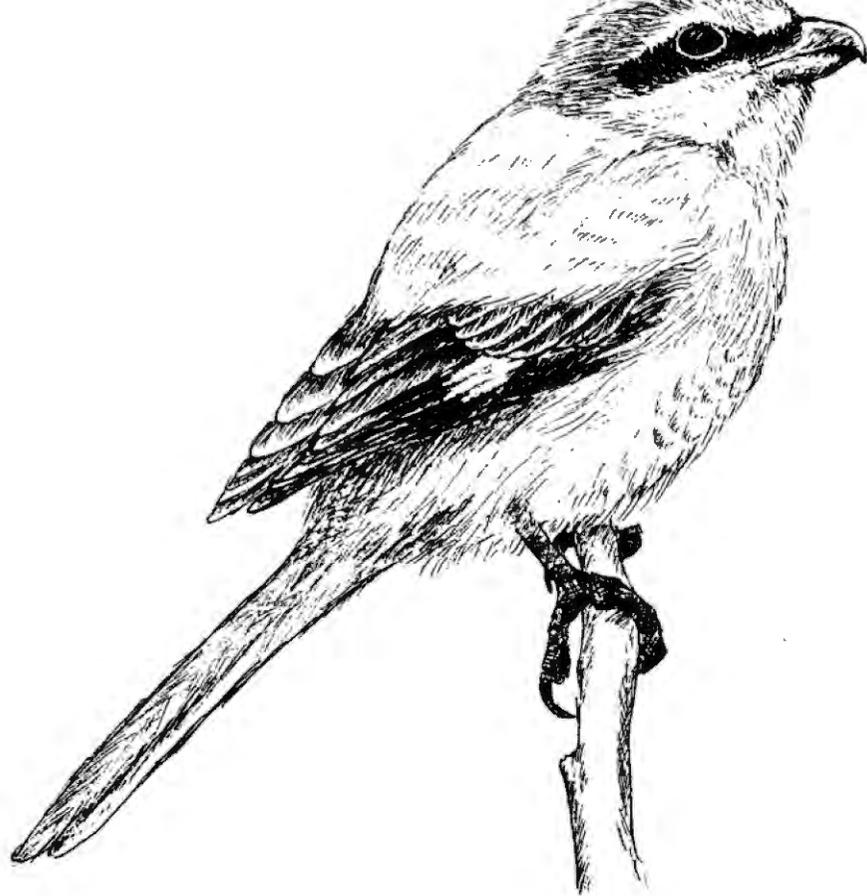
2003(平成15)年6月1日、松阪市松名瀬海岸で開催された県環境部、博物館共催の自然観察会に参加した。5月下旬に大しけによるハシボソミズナギドリの大量死があったばかりである。11時頃、風が強く、曇から晴れ間がのぞき始めたとき、コグンカンドリの飛行を観察した。下面の腹が白く、喉の部分には黒い帯が横にあるところから、コグンカンドリの若鳥であることを双眼鏡で確認した。雌雄の区別は不明であ

る。さらに、午後2時30分、明和町、浜田の海岸堤防上空を飛行しているところを、600ミリカメラで撮影した。餌をもとめ、松名瀬海岸から明和町の海岸にかけて飛行や旋回を繰り返していると思われる(写真:明和町 濱田 市川撮影)。

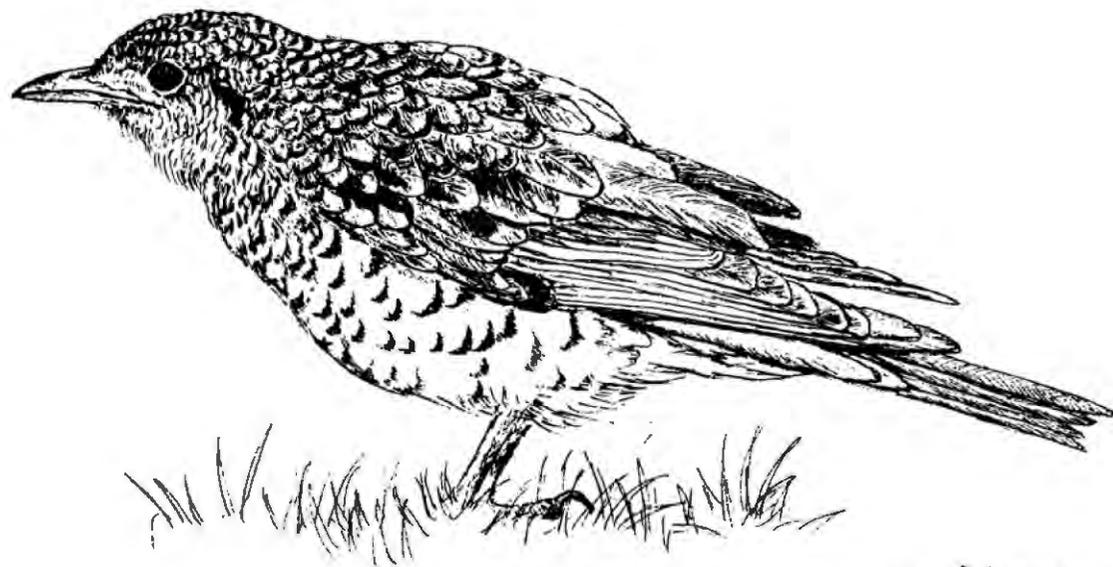
コグンカンドリは体長78cm開長180cmで、全身黒色、腹部は白い。太平洋やインド洋の赤道付近に分布し、日本では台風などにより沿岸部にたまに現れる。県内でのこれまでの記録では迷鳥として、1969年6月9日紀伊長島町大島、1972年6月22日鳥羽市神島などで数例が観察されている。







H. Shimada



H. Shimada



野鳥講座報告

● **バンダーの世界—鳥類標識調査を通して野鳥の魅力を語る—**

2003年8月17日(日)

13時30分～15時30分

三重県総合文化センター三重県文化会館2階中会議室 講師：平井正志 参加者：32名

本会会員の平井正志氏を講師に迎えバンディングのお話をさせていただきました。お盆休みにもかかわらず、会員、非会員あわせて32名の方に来ていただき、平井氏より映像を交え、バンディングをはじめたきっかけ、手法、楽しみ、難しさの話をしていただきました。

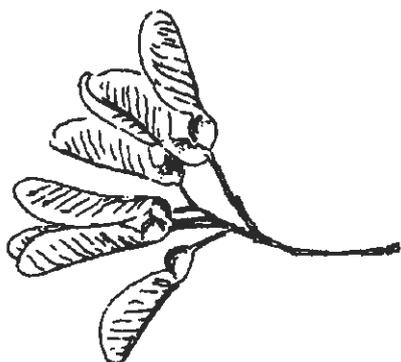
また、通常の観察では解明できない個体の移動距離や寿命の話は興味深く聞かせていただきました。その他、かごぬけの鳥(ソウシチョウ)の捕獲数が増えてきているとのことと魚類、植物、鳥類の世界においても自然界のバランスのくずれが心配されます。

(企画部 今村禎 記)

事務局よりのお知らせ

● 狩猟が解禁されました。毎年、11月15日から翌年の2月15日までの3ヶ月間、河川や海岸、山野で狩猟が行なわれます(指定区を除く)。とくに山野は猟犬が放され危険です。出かける場合は目立つ服装を着用し、狩猟地図で確かめるなどして身の安全に充分ご注意ください。なお、狩猟地図は市町村役場へお問い合わせください。

(事務局にも少しあります。事務局090-1566-6010まで。)



● ただ今、三重県支部のホームページを作成中です。野鳥フォトギャラリーなども開設しますので、ご期待ください。



支部活動の記録 事務局まとめ

● 支部活動の記録(2003年8月～10月)

8/17 野鳥講座 部長会議

8/22 密猟パトロール(南勢地区)

9/5 支部報「しろちどり」第40号発行・発送作業(編集部・事務局)

9/21 2003年度第2回理事会(臨時)を開催した。

10/20 県・環境部を訪問(事務局)

● これからの活動(2003年11月～2004年1月)

11/5 会員宛封書発送作業(事務局)

11/ 伊勢警察訪問(南勢地区)

11/23～24 身近な自然を体験する県民デー

11/15 狩猟解禁に伴うパトロール

● 川と海のクリーン大作戦に

参加しました!

国土交通省が企画した「川と海のクリーン大作戦」に三重県支部会員有志が参加。

10月26日(日)、晴天の五主海岸で、住民ら約100名に混じって、会員(16名)が海岸のゴミ拾いに汗を流しました。ゴミはペットボトルや弁当箱などプラスチック系がほとんどでしたが、中には砂に埋もれた漁網がたくさんあり、数人で引っ張り出す作業もしました。お陰で中型トラック2台分ほど集まりました。どうもお疲れさまでした。



### 理事紹介（北勢地区）

北勢地区の女性陣が頭を寄せ合ってまとめました。

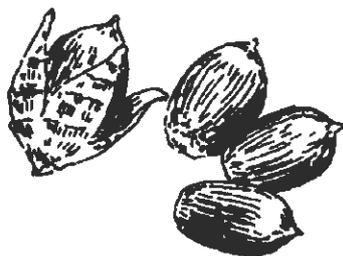
**市川雄二さん** 泣く子もだまる日本野鳥の会三重県支部の支部長代理&北勢地区長。

元小学校校長なんて畏れ多い肩書きを感じさせないやさしいおじさま。定年後の第二の人生をカメラ、ビデオ、旅行と年中野鳥のように飛び回っていらっしゃる。動植物全般に詳しく、その博識で自然とその保護を伝えようと、面倒見よく私達を指導してくださっています。

**村田芳雄さん** 山歩きに長け、藤原岳や御池岳はあつという間に登ってしまわれるらしい。保護部でご活躍。とくに木曾岬干拓地の今後の有り様について一家言あり。木曾岬の話になると一歩もゆずらない激しさがある。普段はニコニコして、まじめで一途とお見受けしたが、お酒が入るとどうなるのかなあ。静かな情熱家。

**近藤義孝さん** 若い情熱家。山男。ほがらかで、人の気をそらさない話題豊富なかた。高校教諭で山岳部の顧問をしておられる一方家庭ではよき夫、父である。会の趣旨をそらさないよう説得力のある意見を出され、いつも圧倒される。三重県支部の調査データをExcelにまとめてくださっているが、最近お勤めもご多忙で未処理データが山積みの悲鳴。どなたかお手伝いしてあげてくださいませんか？

(尾畑玲子)



### 高松海岸干潟を通る臨港道路霞4号線計画について

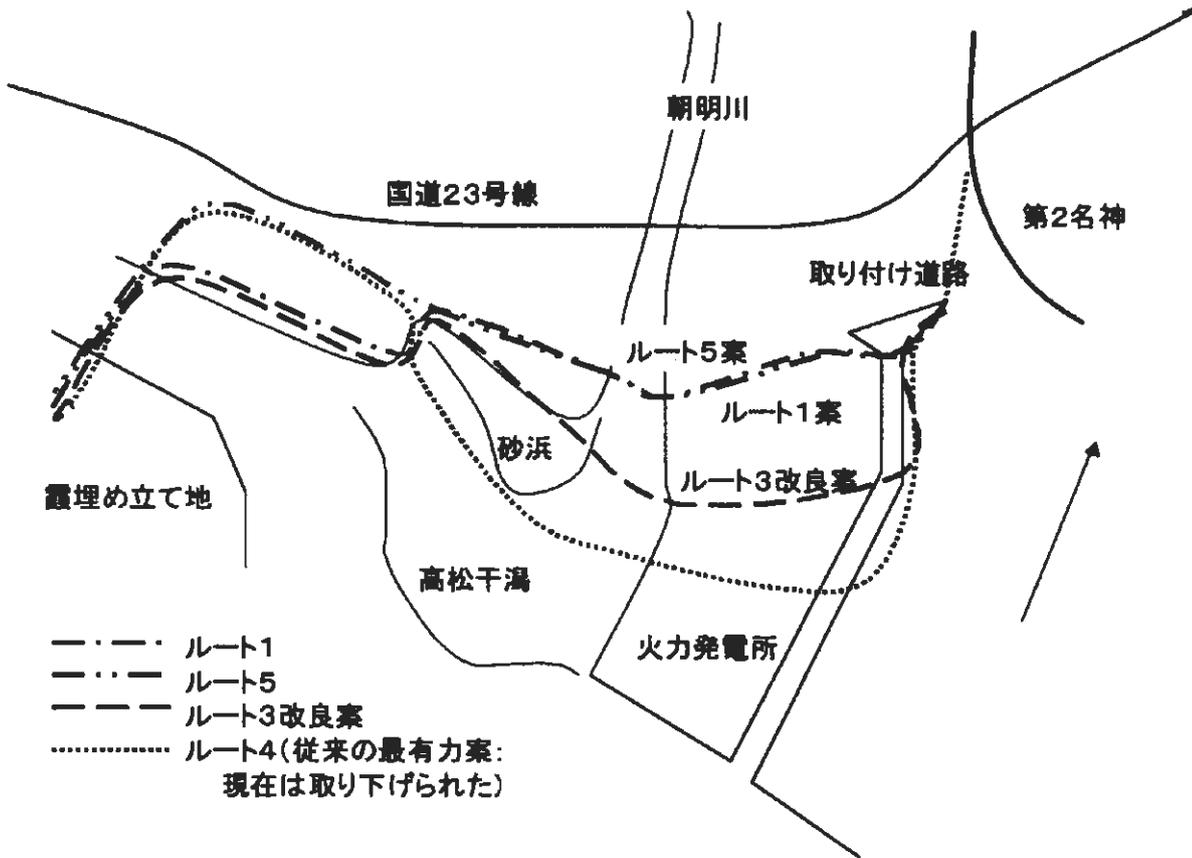
保護部

伊勢湾北部での貴重な干潟、高松干潟には霞埋め立て地のコンテナターミナルへの道路として霞4号線が四日市港管理組合<sup>(注1)</sup>によって計画され、これまでいくつかのルート案が検討されてきました(図参照)。

このほど四日市港管理組合の調査検討委員会では従来最も有力であった、干潟内に橋桁を立てて通す案(ルート4)は退けられました。これは同組合がおこなった調査によっても川越町民が干潟を守ることを重視している結果<sup>(注2)</sup>を反映したものです、また、日本野鳥の会三重県支部や高松干潟を守る会が反対した結果です。しかし、今回干潟に接する朝明川河口をまたぐ案(ルート3改良案)、また少し河口のすこし上流を通るルート1、ルート5案が出されています。このうちルート3改良案が現在最も有力です。地元の高松干潟を守る会はいずれの案にも反対しています。2000年3月15日に日本野鳥の会三重県支部は高松干潟の景観をまもり、自然教育の場としての干潟を尊重することを要望した文書に関係各方面に提出しています。また2001年9月12日の第6回評価システム部会において当時最も有力であった干潟をまたぐ道路建設(ルート4)に反対する意見を述べています。

高松干潟には希少種であるズグロカモメ(2000年12月6日と同年12月12日に各1羽)、ホウロクシギ(2000年6月18日1羽)の記録があり、また猛禽のハヤブサやミサゴが飛来します。さらに今年10月25日アカウミガメの卵が発見され、115個のうち11個が孵化していたという事実が判明しました。これらの事実は高松干潟が貴重な干潟であることを再認識させました。

今回示された、ルート3改良案は河口から干潟に張り出して道路をつくる案であり、照明灯や動き回る自動車のライトは、夜間にも盛んに活動する鳥類にとってまた夜に産卵するウミガメにとって重大な脅威です。また干潟を利用し、



楽しむ住民にとっても自動車が盛んに行き交うのは景観上好ましくありません。

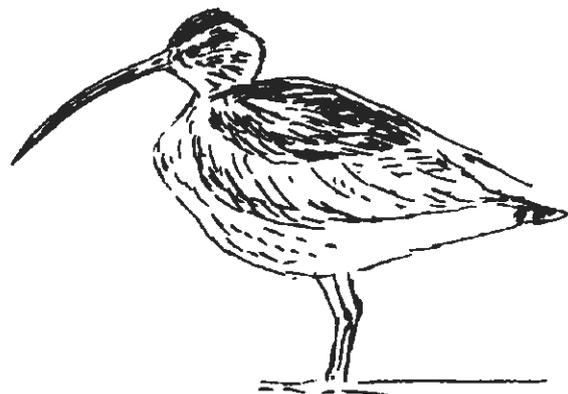
日本野鳥の会三重県支部ではこれらの案に対して対応を練っています。

注1) 四日市港管理組合：三重県と四日市市によって設立された特別地方公共団体で、組織は、県や市などの普通地方公共団体に準じ、執行機関と議決機関からなっている。管理者は三重県知事または四日市市長がその任に当たり、議会は県・市議会の議員から選出された議員で構成されている。霞4号線を計画、建設する主体。

注2) 同管理組合が、川越町および四日市市富州原地区住民およびルート周辺の企業80社の経営者に対して行ったアンケート結果によると干潟などの自然環境の保全が26.9%で最も高い評価を得ており、産業道路の機能充実は13.4%の支持しかありませんでした。

(文責：平井正志・保護部)

図：高松干潟霞4号線ルート案：地図は手書きのためルートの細部は正確ではありません。





左上より、マガモ、コガモ、トモエガモ、オシドリ、クビワキンクロ、オナガガモ、ハシビロガモ、

カルガモ、ヒドリガモ、シマアジ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ヨシガモ

絵：平井正志（安芸郡安濃町）



探鳥会報告

2003年6月～9月

●美杉探鳥会

2003年6月7日 16:30-20:30

美杉村三重大学演習林

坂元伸治・中村洋子 参加者：35名

アカショウビン、カワセミ、コゲラ、ツバメ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ヤブサメ、ウグイス、オオルリ、ヤマガラ、ホオジロ、カケス、19種

奥津駅前に行く途中、大雨だったが、雨も上がりホッとしました。演習林の近くの川のそばで、この川にはカワガラス、ヤマセミなどがいると坂元さんから説明がありました。コノハズクは遠くで鳴いていたので、小さくて声を聞き取れない人もいました。「来年に期待しましょう」と別れました。

●斎宮池探鳥会

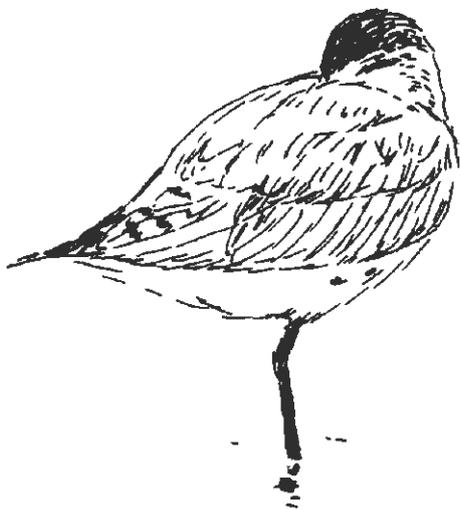
2003年6月7日 9:00-11:00

明和町池村斎宮池

西村 泉・山田昭子 参加者：10名

カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、アオサギ、ハチクマ、キジバト、コゲラ、ツバメ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 19種

探鳥会が始まってすぐ、ハチクマがカラスに追われているのを見た。またなわぼり争いなのかカイツブリのペア同士が激しい体当たりをしている様子をじっくり観察することができた。



●名張川の野鳥を見る探鳥会

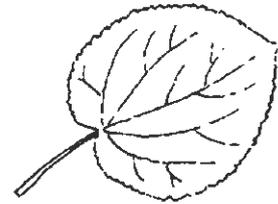
2003年6月8日

9:00-12:00 名張市東町

田中豊成・小林達也 参加者：12名

カイツブリ、カワウ、アオサギ、カルガモ、ハチクマ、トビ、キジ、キジバト、ヒバリ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマガラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 25種

アオサギの幼鳥、巣立ちしたツバメのヒナ、カルガモの親子なども見られた。ハチクマ2羽が現れ、参加者一同感激した。



●二見太江寺探鳥会 2003年6月17日

雨天中止

●安濃川中流とサギコロニー探鳥会

2003年6月21日 10:00-12:00 津市一色町一色橋及び安芸郡安濃町安濃川第3頭首工

平井正志・岡八智子 参加者：16名

カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、トビ、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス(声)、オオヨシキリ(声)、セッカ(声)、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 23種

6種のサギが繁殖するコロニーを観察できた。ダイサギとチュウサギの識別に参加者は一生懸命であった。第3頭首工上流の止水域での鳥は少なかった。探鳥会の後、交流会を開いた。

●木曾岬干拓地探鳥会

(共催：愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年6月22日 9:00-12:00 木曾岬町木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 参加者：14名

カワウ、コグンカンドリ、ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ミサゴ、チュウウヒ、キジ、バン、コチドリ、ケリ、イソシギ、コアジサシ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、モズ、オ

## 探鳥会報告



オヨシキリ、セッカ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 29種

コグンカンドリが木曾岬干拓地の上空をしばらく飛んで伊勢湾へ消えていった。

### ●曾爾高原探鳥会 2003年7月6日 雨天中止

### ●木曾岬干拓地探鳥会(共催:愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年7月27日 9:00-12:00

木曾岬町木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地  
近藤義孝 参加者:14名

観察種 カイツブリ(3)、カワウ(30)、ゴイサギ(1)、アマサギ(1)、ダイサギ(5)、コサギ(5)、アオサギ(3)、カルガモ(15)、ミサゴ(2)、チュウヒ(3)、チョウゲンボウ(1)、キジ(1)、バン(1)、ケリ(40)、クサシギ(3)、イソシギ(3)、キジバト(10)、カワセミ(2)、ヒバリ(10)、ショウドウツバメ(100)、ツバメ(50)、ハクセキレイ(2)、ヒヨドリ(1)、セッカ(20)、カワラヒワ(10)、スズメ(100)、ムクドリ(1)、ハシボソガラス(20)、ハシブトガラス(5)、ドバト(25) 30種類

チョウゲンボウが木曾岬干拓地から鍋田干拓地へ飛んでいった。



### ●木曾岬干拓地探鳥会

(共催:愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年8月24日 9:00-12:00

木曾岬町木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地  
近藤義孝 参加者:17名

カワウ(400)、ゴイサギ(5)、アマサギ(40)、ダイサギ(3)、チュウサギ(11)、コサギ(3)、アオサギ(2)、カルガモ(7)、ミサゴ(3)、チュウヒ(1)、キジ(2)、バン(1)、ケリ(11)、

しろちどり41号

イソシギ(1)、キジバト(5)、カワセミ(1)、ヒバリ(6)、ショウドウツバメ(1850)、ツバメ(50)、ハクセキレイ(1)、モズ(1)、セッカ(10)、カワラヒワ(1)、スズメ(50)、ムクドリ(30)、ハシボソガラス(150)、ハシブトガラス(30)、ドバト(2) 28種類

今年の夏としては珍しいほど暑い日であったため、少し早く終了した。

### ●高松海岸探鳥会

2003年8月31日 10:00-11:30

川越町朝明川河口 高松海岸  
市川雄二・高 和義 参加者:10名

カワウ(30)、ダイサギ(3)、コサギ(13)、アオサギ(2)、ミサゴ(1)、ハヤブサ(1)、イソシギ(3)、ウミネコ(194)、キジバト(2)、アオバト(3)、カワセミ(1)、ヒバリ(3)、ツバメ(6)、ハクセキレイ(4)、イソヒヨドリ(2)、スズメ(3)、ハシボソガラス(20) 17種類

夏休み最後の日。早朝、所によって雨など天気にばらつきがあったようだが、時間が経るにつれ、残暑厳しい日となりました。

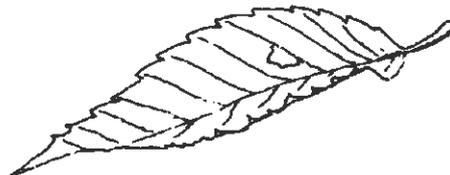
クマゼミが鳴き、いっそう暑さが身に感じました。干潟では貝採りをする人、海上では水上バイクを楽しむ人が水しぶきを上げていました。シギ、チドリ類が少なかったようです。この地へは寄らず、もっと居心地の良い場所を探し求めているのではないのでしょうか。参加者の最近の鳥情報では、近くに住む水谷さんから この場所で7月6日、サギ類に混じってカラシラサギと思われる種がいたという情報をいただきました。興味のあるところです。

### ●五主海岸探鳥会

2003年9月7日 9:30-11:30

一志郡三雲町五主 五主海岸  
橋本富三・大西幸枝 参加者:26名

カワウ、アオサギ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、トウネン、オバシギ、アカアシシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、チュウシャクシギ、ウミネコ、ツバメ、スズメ 17種類





## 探鳥会報告

観察できた野鳥は17種類と少なかったが珍鳥のアカアシシギの真っ赤な脚に魅せられた人が多くいた。探鳥会の後、谷本保護部長から最近五主海岸でカイトボードのため渡り鳥が寄り付かなくなっている現状とこれからの野鳥の生息環境保護のための対応について話があり、参加者全員が真剣に聴き入っていた。

### ●斎宮池探鳥会

2003年9月13日 9:00-11:00

多気郡明和町池村 斎宮池

西村泉・山田昭子 参加者：5名

ゴイサギ、アオサギ、カルガモ、キジバト、カワセミ、ツバメ(300)、ヒヨドリ、ヤマガラ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 11種

朝、雨が降っていたが、天候が回復したので実施した。メインのコシアカツバメは見られなかったがツバメ約300羽が集まっていたのが観察できた。



### ●県民の森探鳥会

2003年9月20日 10:00-11:40

菰野町千草 三重県民の森

矢田栄史・高 和義 参加者：10名

キジバト、コゲラ、ツバメ、ヒヨドリ、モズ、ヤマガラ、メジロ 7種 ツバメ(sp)種不明(2)

コース途中マーキングされたアサギマダラを発見する。羽根にTSN334のマークあり。アサギマダラの移動を記録しているHPに照会中です。

### ●上野森林公園探鳥会

2003年9月28日 10:00-12:00

上野市下友生 上野森林公園

西口章一・前澤昭彦 参加者：12名

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、トビ、イカルチドリ、キジバト、コゲラ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウガラ、ホオジロ、ハシボソガラス 15種

観察種は少なかったが、樹木、野草、昆虫等の観察も含め、久しぶりの快晴でさわやかな初秋の森林内を散策することが出来た。初めての参加者は色んな自然の仕組みについて知識が得られたと喜んでた。

### ●木曾岬干拓地探鳥会

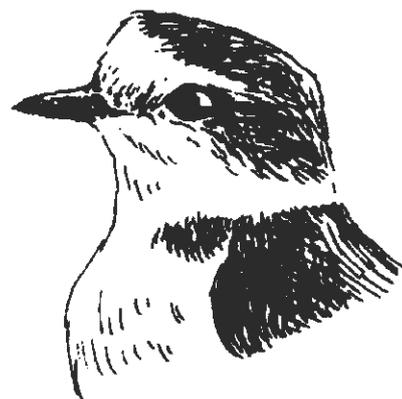
(共催：愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年9月28日 9:00-12:00

木曾岬町木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地 近藤義孝 参加者：15名

カイツブリ(9)、カワウ(50)、ゴイサギ(4)、ダイサギ(10)、チュウサギ(5)、コサギ(11)、アオサギ(5)、カルガモ(29)、ミサゴ(6)、トビ(2)、オオタカ(2)、チュウヒ(5)、ハヤブサ(2)、コチョウゲンボウ(1)、チョウゲンボウ(7)、キジ(1)、バン(1)、ケリ(1)、クサシギ(7)、イソシギ(4)、キジバト(11)、カワセミ(1)、ヒバリ(10)、ショウドウツバメ(500)、ツバメ(2)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(7)、ヒヨドリ(135)、モズ(4)、セッカ(1)、ヤマガラ(1)、カワラヒワ(2)、スズメ(100)、ムクドリ(2)、ハシボソガラス(30)、ハシブトガラス(8)、ドバト(1) 37種

シギ・チドリはほとんど見られないが、猛禽はこれでもかと言うほど観察できた。オオタカやハヤブサが複数同時に観察できたのはこの探鳥会でも珍しい。



しろちどり 41号

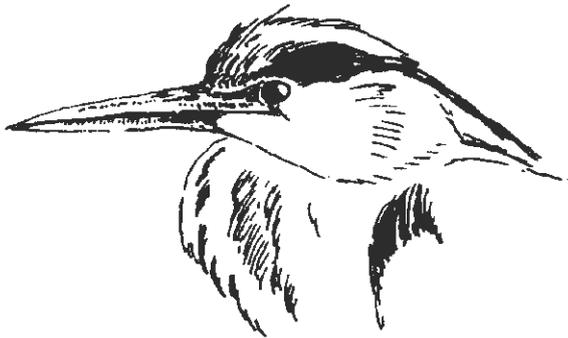


●榊田川河口探鳥会

2003年9月28日 10:00-12:00 松阪市高須町

中村洋子・水森和子 参加者：22名

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ミサゴ、トビ、シロチドリ、トウネン、キアシシギ、ソリハシシギ、ホウロクシギ、チュウシャ



クシギ、タシギ、キジバト、セグロセキレイ、スズメ、ハシボソガラス 20種

シギ、チドリ類は少なかったが、トウネンを近くで見ることができました。

●海蔵川探鳥会

2003年9月30日 10:00-12:00

四日市市西坂部町 海蔵川

尾畑玲子・高 和義 参加者：6名

カイツブリ(2)、カワウ(1)、ゴイサギ(1)、ダイサギ(2)、チュウサギ(1)、コサギ(2)、カルガモ(2)、トビ(1)、バン(1)、ケリ(5)、イソシギ(1)、キジバト(7)、カワセミ(2)、ヒバリ(1)、ツバメ(1)、キセキレイ(3)、セグロセキレイ(3)、ヒヨドリ(1)、モズ(2)、ホオジロ(1)、カラヒワ(1)、スズメ(30+)、ムクドリ(70+)、ハシボソガラス(15)、ハシブトガラス(2+)、ドバト(2) 26種 タカ sp (1)

今日は鳥が少なく静かと思っていたが、終わってみると26種と種類は多く、数が少なかったということ

らしい。可動堰の魚道をみんなで見たが魚がさかのぼる部分が浅く、サギが待ち構えるのに格好の構造になっており、サギが降り立てられないくらいの深みをつくるべきとの意見が出た。



編集後記

夏鳥の子育てが終わる頃には、北からのシギ・チドリの先発隊がやってきます。人間どもが暑い暑いとこぼしていた9月にも、鳥たちは自然の移り変わりを感じ、子供たちを連れて日本の干潟や湿地で体を休めて飛び立って行きます。これが太古の昔から延々と繰り返されているのです。しかし、近年これらの場所は減り、また私たちも知らず知らずに、鳥たちに負荷を掛けていることがあるように思います。安心して休み、採餌ができる環境づくりの輪を広げていきたいものです。そんなことを頭の隅に置きながら、カモなど冬鳥の観察に飛び出しましょう。「しろちどり」では季節ごとの特集を掲載していますが、今後の特集のご希望や会員のページ等への気軽な投稿をお待ちしています。

しろちどり 41号

2003年12月1日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 平井正志

カット： 小坂里香、平井正志

編集：平井正志 〒

発行所：日本野鳥の会三重県支部

杉浦邦彦方

〒516-0026 伊勢市宇治浦田2丁目9-4

印刷：伊藤印刷株式会社

〒514-0027 津市大門32-13